

純潔と寛容 七

本多弘之
honda hiroyuki

直
信
実
心

「利他」(衆生をたすけたいという意欲)の願心が無倦の歩みを持続しているということ、このことは自我の執着を離れることのない凡夫とまったく無関係なのではない。むしろ、「利他」の大悲に包まれて凡夫が成り立

っているのである。凡夫はそれを知らないのだが、実はそれに支えられ、それを踏み台にして立ち上がることができているのである。こういう表現は、実は宗教的な自覚を比喩的なかたちで表しているのであるが、人間が

「間を生きるもの」、つまり「間的な存在」(between being, Zwischen-menschlichkeit)としての自分をよく見つめるなら、相手と自己との関係を成り立たせている深みに、自分の思いよりも深層にある、「愛」とでも言うべきはたらき(これを仏教では、「如来の大悲」と表現する)があることを言おうとしているのであろうと思う。

たしかに、われらの自覚的な表白をするならば、「罪悪深重、煩惱熾盛」と言うしかない。これが親鸞の自己認識であり、その教えにうなずく真宗門徒の心根でもある。しかし、その罪悪の衆生が、共に愚かないのちを生きる存在として生活空間を与えられ、生存することができる「場」には、「如来の大悲」が光明となり、声名となつてはたらいっていると教えられているのである。

親鸞が依り処とした經典である『大無量寿経』は、このわれらを深く信頼してはたらいっている悲願を、「法蔵菩薩」の物語としてわれらに語りかけている。この法蔵菩薩が、衆生を救済するために本願を選び取り、その願を成就するために「兆載永劫の修行」をして、「阿弥陀仏」に成つた、という。この『大無量寿経』の物語が阿弥陀如来の因果であるから、因位の法蔵菩薩の願を、果上の名である「阿弥陀如来」の「本願」とも言うのである。この物語の主体たる法蔵菩薩を、衆生の意

識よりも深く衆生を支えてはたらいっている深層意識(これを唯識論では「阿頼耶識」と名づけている)と対応させて、衆生の深みに寝ても覚めてもはたらき続ける願心ということを明らかにしたのが、曾我量深師の「法蔵菩薩論」である。

苦悩の衆生を悲愍する願心は、苦悩の歴史を自己の背景としている。苦悩の間から生まれて迷没の生存を生きる群生と一体である。まったく相反する方向のようだが、逆に対応しつつ一体なのである。業報の生存は、迷いの人生であるが、これを担い、これを翻して光明の朗らかさをもたらそうとする法蔵菩薩の大悲は、したがつて迷いの業報を黙々と担う阿頼耶識と別ではない。

一切の経験を作り立たせていく生命力を、阿頼耶識は経験の蓄積(生活経験の重畳)によって、生存の根底に与えられているとする。経験の可能性は、経験してきた歴史の力なのである。このことを宗教的な要求においても、当てはめられるのか。仏教の教えの体験は、迷妄の歴史のなかにはなかった無漏(煩惱が少しも影を宿さないこと)の体験なのだという。

それに対して、われら凡夫のいのちの歴史は、一点たりとも煩惱の影響下にならないものはない。すべて、有漏の経験の積み重ねなのである。これを「有限」と「無限」という概念

で表現するなら、有限の積み重ねは、決して無限にはならない。人間の生存はあらゆる面で有限であるから、この有限の意識や努力は決して無限には到達できない。

にもかかわらず、仏陀の教えによって、光明の作用を受け止め得るとするなら、その経験の可能性は、どこから来るというのか。これについて、「聞熏習」ということが言われている。仏陀の教えは、「清浄なる法界からの教」(浄法界等流の教法)である、つまり、仏陀の言葉は、無漏の体験を背景にした言葉であるから、これを衆生は「聞く」ことによって、まったく新しい経験が創出されるのだというのである。こういう論理構造は、親鸞の「名号の信心」の場合にも語られることである。大悲なる本願が、無明の衆生に名言となつて、煩惱生活のただ中に清浄なる経験の因を植えようというのである。この意味を、繰り返して「聞く」ことによって、煩惱の身の罪を「消し失わず」して、清浄なるところを経験する。それが、法蔵願心自身の永劫の修行の成就としての「真實信心」なのだというのである。

(ほんだ ひろゆき・親鸞仏教センター所長)